
人＝龍の物語

究極神団・零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人Ⅱ龍の物語

【Nコード】

N4848K

【作者名】

究極神団・零

【あらすじ】

人里離れた山奥……其処に一人の少年が暮らしていた。だが少年にはとある秘密が……。それは――

プロローグ 人Ⅱ龍（前書き）

はぁーい♪

どーも皆様、究極神団ですW W

気分によりまた新たな連載を始めちゃいましたW W W W W

この小説もまた異質、特殊ですよ勿論W W

まあ………お楽しみあれ♪

プロローグ 人Ⅱ龍

「――ふう。こんなもんでいいかな」

一人の少年がたった今薪割りを終え立ち上がった。その身体には大量の汗が溢れている

「かなり汗かっちゃった……川にでも行こつと♪水浴び水浴び♪」

そして少年は汗を流す為にスキップしながら川へ向かっていった。余程水浴びが好きなのだろう

――此処は街や村、人里離れた山奥の更に奥、其処ひっそりと建っている一軒の小屋。其処に先程の少年は住んでいる。

少年の小屋から川までは少し距離があるがそんなものの気にしないと、いう感じで少年は歩みを進めていく

少年には特徴があり、真っ黒で膝まで届く長い後ろ髪。そして頭の高中心から一本だけ髪がびこん、と立っている。だが背はそんなに高

くない。

そしてもう一つ――

「あゝ♪気持ちいいなあゝ♪」

気持ち良さそうに水浴びをしている少年。だがそんな少年に忍び寄る影が……

――ギャオ、ギャオ

青い鱗を持つ小型のモンスター、ランポスが何処からともなく数頭現れた。ランポス達は獲物を見つけたと知らせるようにギャオギャオと鳴き声をあげる

「水浴びしてる途中なのに……」

ランポス達の出現で一気にテンションが下がった少年

そんな少年の下がったテンションに追い討ちをかけるように、ランポス達の親玉、ドスランポスが現れた

「ギャアオ！」

少年に向かって威嚇をするドスランポス。回りのランポス達も威嚇をする

「しょうがないなあ……」

そう少年は呟くと、その場で力を抜いてくるり、と一回転をした。

すると少年の身体が光り、身体が変化しはじめた

ちよつと細い腕はたくましい翼へ

ちよつと細い足は強靱な爪を持った足へ

お尻の部分からちよつと太めの尻尾が

そして顔は立派な龍の顔へと変化した

そしてその身体は銀色に輝いていた

「ガオオオオオオ！！！！」

そう、少年は龍へと変身したのだ

今の少年の姿はリオレウスと呼ばれる空の王の中でも希少種の姿である。

その変身した少年の姿をみたドスランポス達はそそくさとその姿を山の奥へと消して行った

「ふう」

、とため息を一つつき先程とは逆の方向にくるりと一回転すると龍から人の姿へと戻った

——少年の一番の特徴、それは、人間の姿から龍に変身出来る事

「さてと……水浴びの続き♪」

そして少年は、再び水浴びを始めた

この物語は、人から龍へと変身出来る一人の少年を取り巻く運命を
書いた少年の物語である――

プロローグ 人Ⅱ龍（後書き）

いかがでしたかな？

主人公はリオレウス希少種に変身出来る少年です W W

少年

「こんにちは♪」

なぜリオレウス希少種なのかって？

それは………ただリオレウス希少種が好きだから W W

少年

「あらま（汗）」

たったそれだけさ W W

文句は受け付けない W W

少年

「因みに僕の名前は次回明かされる………らしいです。お楽しみに
！」

それでは♪

第一話 少年の名（前書き）

この話もプロローグでよかった気がするがまあいい W W

少年

「今回は僕の名前が明かされるよ♪」

ついでに少年の過去にもちらっと触れます W

少年

「それではどうぞ♪」 ↑ 一本立った髪の毛がぴこんぴこんなってる

可愛いなあもうっ！

第一話 少年の名

この物語の主人公は、龍に変身出来る能力を持っていた

「……」

人の姿に戻った少年は、辺りをキョロキョロ見回した

「……誰にも、見られて……ない……よね……?」

異常なまでに警戒する少年。

それもそうだろう。普通人が龍に変身するなんて、あり得ないのだから

その上龍の姿で見付かれば即座にハンターと呼ばれる集団が命を狙いにやってくるのだから

「よかった……誰もいなくて」

誰もいない事を確認して安心する少年

「さて……朝ごはんにしよっと♪」

先程とうってかわってほんわかな雰囲気をかもし出しながら小屋に向かっていく少年

一本だけぴんと立っている髪の毛がくるくると回転している。

今にもその髪の毛一本で空を飛べそうな気がする

少年の名は、ブライト

まさに彼の性格がそのまま名前になっている

少年——ブライトは、人にも、モンスターにも、全て嫌われた存在だった。

人間からは迫害を受け、モンスター達からは命を狙われ、彼には、居場所がなかった

ただ、龍に変身出来るというだけの理由で、全ての存在から嫌われていた。

そんな彼の過去は、身体中にある数多の凄まじい傷が物語っていた

「いけないいけない。服を着るの忘れてた♪」

だがそんな過去を微塵も感じさせない。彼を此処まで支えるものは、
いったいなんなのだろうか

「あうっ！」

服を着ながら走って小屋に戻ろうとしたため小石につまづき転けた
ブライト

天然かと思われる
可愛い奴め

「いっただっきまゝす♪」

ブライトの前には、沢山の焼けて調理された茸が置かれてあった

此処にある茸は厳選茸と呼ばれるとても高級な茸を集めたものばかりだ

因みにどうやって焼いたかという点、龍の姿に何時でも変身出来る
ため、龍の力を人の姿でも使えるのだ。だが人の姿だと龍の姿の時

より能力的に劣ったり空を飛べたり出来ないのだ。それでも炎ぐら
いは発生させるのでその生み出した炎で茸を焼いたのだ

……ただ、所々に焦げている跡や完璧に焦げているのがあるが

どうやらブライトは気付いていないようだ

そしてその焦げた茸を――

パクつ、と一口

[illegible]

——あんな焦げ焦げの茸を口にしたブライト

その味は想像を絶する事だろう

小屋に、
ブライトの悲痛な叫びが木霊した

「ふええ……苦かったよお……」

涙目でそこら辺をおろおろするブライト

なんとも可愛らしい

「でも……次は失敗しないぞー♪」

だが直ぐに立ち直り腕を天高く突き上げ「おー♪」と、気合いをいれていた。

一本立った髪の毛がぴーんと立ち上がり、また、くるくると回り始めたのだった

第一話 少年の名（後書き）

とゆー訳で、少年の名前はブライトです

ブライト

「よろしくね♪」

やっぱり可愛いな、この子。うん
悶えキャラは成功だなおいww

この一本立った髪の毛がなんとも可愛さをそそるww↑なにそれ

ブライト

「ふえ？」

……抱き締めちゃってもいいよねww
えーい♪↑抱き締める奴

ブライト

「ふえあ?!」↑抱き締められる奴。なんか妙に大人しい

ああ……可愛い♪

キャラ設定（前書き）

まあ………キャラが出るたびに更新するぜ W

まだ主人公しかないがな W

キャラ設定

まだキャラが主人公しかいないのにキャラ設定を作っておくぜww

ブライト（人⇨龍）

男

多分16歳

特殊能力

・変身

・炎

・????

本編主人公。人から龍、龍から人へと変身出来る能力を持つ少年。
その為人間からは迫害を受けており、身体中にその迫害の時に追った傷後が残っている。

膝まで届く長い後ろ髪に一本だけ頭のとっぺんから立っている髪の毛が特徴。

この髪の毛は（以下ぴよこ毛）ブライトのテンションによって様々に変化するらしい。ぴよこ毛で空を飛べるとか……………。

因みに龍の姿になると「ガオ」としか喋れなくなる。

身長は150cmとちよつと、体重は37kgと少し小柄な子。

一般人の姿でも龍の力（炎）を使えるが、龍の姿の時より威力等が落ちる。

天然でのんびり口調。普段は滅多に怒らない。元気ハツラツ。よく想像すると髪の毛のせいか微妙に色っぽかったり女の子に見える

たり見えなかったり………

まあブライトしか居ないから以上なんですけどね W

キャラ設定（後書き）

速くキャラ増えないかねえ
W

第二話 悲劇の後の……（前書き）

今回は少しグロい描写があります！

苦手な方はご注意くださいまし！

ブライト

「警告だよ♪」

第二話 悲劇の後の……

悲劇の朝御飯を終えたブライト

「ルンルンルン♪」

なにやら髪を整えたりしている。

「髪の毛は大切にしなきゃね♪」

女の子か！ とツッコミを入れたくなる発言をさらっと言うブライト。男の子なのに今の発言で女の子にしか見えない気がするのは気のせいだろうか。その上整った髪の毛が余計に女の子の雰囲気をもし出している。

「準備完了♪」と言って、ブライトは家から出て、森の中に入っていた。

その頃、森の奥で、

「ガルア……………」

一頭の龍が、身体のいたるところから血を吹き出しながら、その身体を引きずっていた。

その龍の歩いた後は、真っ赤に、その傷付いた身体から吹き出す血で染まっていた。

そんな森の異変を知るよしもなく、ブライトは呑気に鼻唄を唄いながら歩いていった。どうやらモンハンの主題歌？を唄っているようだが……そのメロディは全くあっていなかった。

「……続きどんな感じだったっけ？」

その上下忘れしていた。

「まいっか♪」

いいのか。とツツコミを入れてはいけない。入れたくても入れてはいけない。何故ならば、素で言っているからだ。

そんなブライトの前方に、数匹のランポスが現れた。

だがランポス達はブライトに見向きもせずは何処かへ去ってしまった。

流石のブライトも何時もとは違う雰囲気を感じ取ったらしく、そつとランポスの後をつけていった。

暫くランポスの後をつけていると、道を進むにつれて地面に、赤く染まった部分が現れ始めた。

「……これは……………」

ブライトはその赤い部分の匂いを嗅いで、その赤い何かを理解した。

「血……………」

そう、それは血だった。どうやら地面に附着してか時間が経っているようで、少し固まっており、色も少し黒かった。

ブライトもしかして、と一つの考えを脳裏に浮かべて、血の附着している方向へ走り出した。

暫くすると、沢山のランポス達が居るのが見えた。そしてその中心で、蹲っている黒い龍も確認出来た。

よく見ると、その黒い龍は傷だらけで、沢山出血していた。

先程の血はあの龍のものなのだろう。

「速く助けなきゃ……」

ブライトは、今の人の身体から龍……リオレウス希少種の身体へと変身させ、傷付いた黒い龍の元へと降り立つ。

「ガアアアッ！」（今すぐ此処から立ち去って！）

ブライトはランポス達にバインドボイスを放つ。

というより、ブライトは争い事が嫌いなので基本的にバインドボイスしか使わないのだが。

そのバインドボイスを中心として、草はペチャンコに潰れ、木々はバキツという音をたてながら折れていた事は、その凄まじさを物語っていた。

それに巻き込まれた数匹のランポスは、大きく吹き飛ばされ、宙を舞った。

流石に味方が吹き飛ばされた事に恐怖を抱いたランポス達はそそくさと何処かへ去って行った。

「ガオ……」 （ふう……）

ブライトは一瞬安堵してから、傷付いた龍の方を見る。

其処にいた龍は、黒い身体と鱗を、両前肢に鋭い刃、フレード尻尾には触っただけでも傷付きそうな棘を持つ龍——迅龍ナルガクルガが苦しうに、微かに息をしていた。

「ガオ！」 （大変！）

ブライトは急いで人の姿に戻り、「ちよつとだけ待っててね」とナルガクルガに声をかけ、薬草等を探しに行った。

それから数分。ブライトはその手に沢山の薬草を抱えて先程の場所

に戻って来たが、其処にナルガクルガはおらず、
変わりに傷だらけ
て沢山血を流している少女が居た。

第二話 悲劇の後の……（後書き）

……もう皆さん、お分かりですよね？

この少女が………という事は

第三話 気が付いたら……（前書き）

友人にせかされて書きなぐったら以外にワロスにW W

ブライト

「？」

少女の名前も判明するぜい W

第三話 気が付いたら……

私は、気が付いたら……全く見知らぬ場所に居た。

「ここは……？」

私はきよろきよろと周りを見渡す。周りが壁に囲まれているから……誰かのお家かな……？

次に、立ち上がろうとしたら……

「っ?!」

身体に激痛が走った。その痛みは凄まじかった。体全体に電気が駆け巡ったような痛みを感じた。痛みを堪えながら、私は自分の身体をみた。よくよくみると、包帯が巻かれていた。

「……？」

私は、何故身体に包帯が巻かれているのか分からなかった。

実を言うと、寝ていた前の記憶が無い。

何故こうなったのか、その部分だけ思い出せなかった。

自分の名前は覚えている。

そして私が……という事も覚えている。

なのにこうなる前の記憶だけが思い出せなかった。

だからといって今はそこまで気にする必要は無かったから頭の片隅にその事を置いておいた。

「んっ……………」

私は、身体に痛みが走らない程度に、少し身体全体を伸ばしてゆっくりと立ち上がる。ああ、生きてるって素晴らしい……。何故こんなことを思ったかは内緒でよろしく。

「さて、と……。此からどうしようかなあ………」

私は悩む。

幾らこの家に住む人が優しくても、私の真実を知ってしまえば……

……

だからといって、無言で立ち去るのはこの家の人に失礼だし、何より、私は怪我をしているから……あまり自由には動けない。精々ゆっくり歩く程度しか出来ない。多分……歩く速度は亀さんとおんなじぐらい……だと思っ私。

「とにかく、お礼を言わなきゃ……。其から決めよう……。うん。」

自分に大丈夫。とおまじないを掛けるように言い聞かせ、部屋を出ようとする――

「あゝ起きたんだねゝよかったゝ」

違う部屋から、男の子がいきなりやって来た。

――

「びゅーんゝ」

「あわわ……」

今の現状を言うと、何故かブライトが……少女をおんぶして走り回っている。「部屋を案内するよ♪」とブライトが高らかに宣言？
して、少女が戸惑っているのを無視して（というより戸惑っているのに気が付かずに）部屋を案内していた……というより走り回っていた。

「以上で全部の部屋の案内終わり♪」

説明してたのか？ という疑問は、きっと、読者の皆様の頭の中に根強く残っているだろう……。

「わかりましたあ……」

若干目を回しながらそう答える少女。
何時説明した。というツツコミが止む事は無いだろう。

「所で……」

「なあに？」

まだちょっとフラフラな少女の口調は、僅かに呂律が回っていないかった。

「名前を覚えてくれないかな？」

なんの遠回しもせずに、単刀直入に聞くブライト。
それに対して少女は、

「いいよ」

まだフラフラしながらそう答える。

てかいのか。というツツコミは聞こえないフリ……をしたい……。

「私はね……クレアって言うんだよ」

クレア。それが少女の名前だった。

というより、もういきなり少女にキャラ崩壊の兆しが見え始めてしまい、名前どころではなかったりする……作者。

「クレア……良い名前だね♪僕はブライト♪宜しくね♪」

「！　よ、宜しく……」

ブライトの「良い名前」という言葉に反応し、僅かに顔を赤くするクレア。

それに気が付いたブライトは、

「どうしたのクレア？ 顔赤いけど……？」

心配するブライト。

クレアは「な、なんでもない……」と言いながら、少しずつゆっくりと後ろに下がり距離を取っていた。

「……熱でもあるのかな？」

そうブライトが言った時には、（クレアにとって）既に大変な状況になっていた。

ブライトが……自分のおでこをクレアのおでこをひっつけて熱を測っていたからだ。

ブライトの顔が零距离にある上に、おでこをひっつけられているという現状で、クレアは

「ふえええええ………」

と少し声を上げた後に、顔が真っ赤っかになって爆発して、頭から大量の湯気を出しながら気絶していった。

「ふえ?! 僕なにかした?!」

クレアが気絶したのは半分は自分のせいだとは気付かないブライト
だった

第三話 気が付いたら……（後書き）

とゆー訳で、少女もといクレアです

クレア

「よろしく」

クレア、に特に意味はありませんw

クレア

「……（汗）」

まあまあ↑こら

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4848k/>

人＝龍の物語

2010年10月8日22時13分発行